

「高齢聴覚障害者のくらしを地域で支える」

共同研究者 全国ろうあヘルパー協議会 会長 廣田 しづえ
助言者 一般社団法人 和歌山県聴覚障害者協会 会長 福田 美枝子
司会者 特別養護老人ホーム ななふく苑 伊従 澄恵
居宅介護支援事業 桜ヶ丘 濱田 良介

はじめに

今回の参加者は、72名、レポート5本あり、地域活動支援センターに関する報告が多かった。1日目にレポートを2本を報告してもらい、2日目にレポート3本の報告をおこなう。その後、全体で、地域の現状・取組の様子や課題などを報告。意見交換をおこなった。

レポート報告の概要

(1)「つばめの会」を通じた仲間作り

乙訓聴覚言語障害者地域活動支援センター
地域第2福祉部 乙訓地域活動支援係
曾和 康子

「聴覚障害者が自由に集まれる場、高齢障害者の生きがいの場」を求め乙訓デイは開所、開所までにはお試しデイを1年間38回実施、延べ825名が利用された。

「つばめの会」は利用者で構成される自治会でサービスを受ける利用者としてではなく、自分たちが主体的に「自分たちの暮らしは自分たちで決める」ためにさまざまな活動を行っており、まさに「言うは易し行うは難しい」ことをどのように行っているか、行っている内容はどんなものかを報告いただいた。

(2)「わがままなくらいがちょうどいい」

いこいの村聴覚言語障害センター
高齢福祉部 介護支援課
川崎 史生、東やよい

国の施策として「地域包括ケアシステム」が提唱されており、今後「地域でのつながり」は必要不可欠となってくる。

ケース報告を通してその人が地域で育んできた地域でのつながりを一つの社会資源としてとらえる重要性、また地域でのつながりをケアマネージャー他関係機関が集まり必要性をどう理解し作りあげていくのか、そのための工夫はどうしているのか？などの報告をいただいた。

(3)「地域生活を支えるため地域活動支援センターの役割とは？」

京都市聴覚言語障害センター地域第二福祉部
京都市東部障害者地域活動支援センター「小町」
市瀬 規美子

以前、聴覚障害者が孤独死し、それをきっかけに楽しく集まってもらえる場を作りたい思いから、10年間試行錯誤のうえ、やっとの思いで小町を開所した。取組や交流を通じて「人として」の暮らしを取り戻す場になっている。聴障協や地域の相談員と連携をしながら、ひとりぼっちにならないような働きかけを続けている取組を報告いただいた。

(4)「心から楽しめる居場所を求めて」

聴覚障害者就労継続支援センター ふくろう
福本 尚子

就労継続支援B型として開所した事業所には、コミュニケーションが様々な15名の仲間が活躍している。2名の報告がある。具体的な連携や支援方法の報告があり、お2人に共通して、一人ひとりに合った方法でコミュニケーシ

ョンをとることで生活がひろがることや、地域と関係機関と連携することの大切さ、聴覚に特化した支援をおこなう役割の重要性を報告いただいた。

(5)「生活支援センター相談・支援から、聴覚障害者のための社会資源の拡充へ」

京都府聴覚言語障害センター
宇治市聴覚障害者生活支援センター
中島 あい子

京都府南部（山城地域）での取り組み、施設の役割と課題のレポート報告。手話ができるケアマネやヘルパーが少なく、聴覚障害者の使える社会資源が少ない。障害者サービスを使いながら、介護保険の年齢になったら、サービスを併用しているためケアマネとの連携が不可欠。自立訓練（機能訓練）の期間が2年半と限られている。集団参加やコミュニケーションの入口の場になっているが、訓練終了後の行き場をどのようにしていくか課題が残る。事業をはじめするには担い手を増やさなければいけない。それが鍵となる報告をいただいた。

助言者まとめ

各地域からの取り組みは非常に興味深い内容であった。各地域で頑張っておられることはよくわかったが、今後は利用者支援だけではなく制度面に関しても目を向けていく必要があるのではないか？と感じた。

例えば地活とB型の違いは？曖昧な方もおられるように思う。地活は市町村事業であり、各自治体により金額に差がある。地域格差を是正し、社会資源をより整備していくためにもろうあ連盟として国に対して要望を出しているのだが知っている人は何人いるか？

ろうあ協会と結びつきが薄い、あるいはろうあ協との活動に参加している人が少ない地域があったりする。仲間を支えていくため協会などと一緒に運動していく大切さを感じてほしい。

今回20回目ということで成功事例が増えている。ろうあ高齢者の増加、支え手の人材

養成などまだまだ課題はある。自分の地域での付き合いをもっと広げていき皆でその課題を乗り越えて行けるよう今回学んだことを地域に持ち帰ってほしい。

共同研究者まとめ

社会資源がまだまだ十分でないなどの課題が山積みであると感じた。だが、取り組みを続けていくことが大事。その取り組みを通じ実績をつみかさねていくことでそれを行政が評価してくれ、事業が始まることもある。

北海道のボランティアサークル「とも」は事業所と連携し17年間活動している。その中で地域住民にろう者の存在や手話の理解を広めて行っている。

大阪ではサークルを組織した手話サークル連絡会があり、地域活動支援センターで初めてのお試しカフェに取り組んだ。手話サークル役員が入門過程を受けている受講生とろう高齢者を繋ぐ役割を果たしていたりする。そのような人との繋がりを作っていくのが大事。

人との交流の場を作り啓発していく、その中で問題にぶつかればろう協にも要望をだす。ろう協も受け止め討議し、運動・交渉につなげていく、その流れが大事だと思う。

現場で頑張っている仲間がいるのは嬉しいこと。しかし、人的面においても人材の確保、技術・質の問題などがある。

大阪では72歳のヘルパーがいる。若い人がなかなか増えないというのは全国的な問題。今回のように事業所職員、地域での支援者が集まり学び合える場というのは非常に重要と思う。

全体まとめ

レポート報告以外に参加者からも各地域の現状・課題を発表いただいた。それぞれに組みを行っているがそれを今後どのように発展させていくのか？また発展させていくための人材確保をどうするか？が課題として挙げられていた。

地域生活を支えていく、そのために必要なものは何か？社会資源の整備はもちろん必要であるが費用がかかる、整備に時間がかかるなどの問題がある。それに対して運動・交渉の継続は必要。だが、それだけではなく地域でのつながり、横のつながりをいかにして作っていくかの視点も重要であることを感じられる分科会となった。